

分会対抗 ソフトボール大会

とき 10月5日(日)
ところ 和光スポーツアイランド
同日夜、中間決起集会も行います!
ところ コリアンBBQパルコピアガーデン

組合員とその
家族の皆さん、
ぜひ参加ください

9月のなんでも相談会は、税務・経営相談が25日(木)、法律相談が24日(水)です。支部へ要予約。
詳細は東京土建豊島支部 TEL 03-3986-2471

けんせつ北部

6・7月合併号

(購読料は組合費の中に
含まれています。)
定価三十円

発行所
東京土建一般労働組合
城北ブロック会議
東京都豊島区西池袋 5-22-15
電話 豊島 (3986) 2471
北 (5390) 6021
板橋 (3963) 5325
練馬 (3825) 5522
発行人 寺島 耕平
発行予定日 毎月4回
1日、9日、17日、25日

最優秀企画賞と大会特別賞の快挙
豊島支部青年部玉川イカダレース

向かって右から、唐沢さん、加藤さん、駒谷書記、高浪さん
(和田青年部長はレース後早退)

33回目となる玉川イカダレースに、豊島支部青年が今年も挑戦し、3度目の正直ならぬ大きな爪痕を残した。古代狛江カップが正式名称のイカダレース、名称の由来は割愛するとして、今年エントリーしたのは91チーム。豊島支部の他に、地元の狛江支部と豊島支部同様なぜか遠方の渋谷支部の3支部の青年部がエントリーした。

1.4キロのコースを自作のイカダを駆使して、5人まで乗船可能な漕ぎ手がスピードと企画性を競う。7チームごとに10分刻みで出艇するが、全く前進できないイカダもあれば、浮くのさえまならぬイカダもある。豊島支部は5レース目に参加、3度目の挑戦だけあって、艇は安定していて、デコレーションのラーメン屋屋台のテーブルに置いたどんぶりからは、ドライアイスの湯気も沸き上がり、彼ら

がスピードではなく、職人の技術力とユーモアにアピールのポイントを絞っていることが容易にうかがえる。スピード勝負のチームはイカダの形状も長細く、イカダというよりはレガッタのボートのようで、ゴールまでのタイムも一般で11分、小学生でも15分。

出艇からゴールまで、ただただこぎ続けるラーメン屋台の漕ぎ手たちに、唐澤青年部長がリーダーを勤めるボーイスカウトの少年たちから途切れない声援が送られる。体力的なきつさは、遠い陸地から見ても良く分かるほどだ。なかばやけくそになってオールを漕ぐ彼らだが、それでも水の抵抗を考えた形状の艇の製作など一顧だにしない潔さが心地良い。若者らしい無鉄砲さ、功利に依らないスタイルが本当にうらやましい。

豊島支部青年部のゴールタイムは

35分で、渋谷支部が21分、狛江支部が29分なので、早さでは完敗だったが、その後の表彰式で、狛江支部が企画賞、そして渋谷支部の優秀企画賞に続き、豊島支部は、最優秀企画賞と第33回大会特別賞の両賞を授与された。最優秀企画賞もそうだが、33回大会特別賞というのが素晴らしい。今回の大会で一番輝いてたと評価されたのだから。

狛江支部は33回の大会で29回も参加している。レース当日は、支部会館を他支部の仲間達にも開放してくれている。渋谷支部は企画賞を受賞したにも拘わらず21分の好タイムを記録した。レース後にみんなで楽しめるように、バーベキューを準備してくれていた。豊島支部青年部の活躍は、こうした支部を越えた仲間達との友好が大きな原動力だったに違いない。

つぶやき

オガララ帯水層は、北アメリカの大穀倉地帯の地下に分布する浅層地下水帯で、日本の国土面積を超える広さを持っています。

米国のカンザス地帯では、多くの肉牛が飼育され、牛肉が生産されています。肉牛生産に必要なトウモロコシなどの穀物生産には膨大な水が必要で、このカンザスの穀倉地帯はオガララ帯水層の地下水に頼って生産されています。しかし、この地下水が枯渇しつつあることが明らかになっています。遅くとも2050年～2070年には枯渇すると推定されています。

オガララ帯水層が枯渇すれば、米穀倉地帯での年間5千万トンの穀物生産が困難になり、日本の家畜の飼料とされている米国産トウモロコシの輸入が困難になります。そうなれば、日本の家畜生産や酪農生産が成り立たなくなります。

現在の日本の食料自給率は38%です。2019年度の先進国の食料自給率は、カナダ233%、オーストラリア169%、フランス131%、アメリカ121%、ドイツ84%、スペイン82%となっていて日本は異常に低いです。日本が食生活に不可欠な小麦、家畜の飼料、大豆などは、そのほとんどが輸入に依存しています。耕作放棄地での家畜の放牧や、二毛作を復活させるなど、食料自給率を上げる対策はあります。また、お米に関しての自給率は、ほぼ100%なので主食の中心にご飯を位置づけることで、食料自給率も上がります。日本の食料、農業について真剣に考え、改善していかなければいけないと思います。

(H.H)

秋の仲間づくり月間が始まります

組合拡大にご協力ください

また、今年の秋の仲間づくり月間の時期がやってきました。9月、10月の二か月間に集中して、新しい仲間を組合に加入させる取り組みです。

組合では、職人の賃金アップの要求をはじめ、土建国保への補助金の増額や、インボイス制度の廃止、紙の保険証の存続など、数えきれないほどの要求を大手企業や、国、自治体へ行っています。これらの要求は、全て仲間の内から出てきた要求で、こうした要求をひとつひとつ実現していくことで、組合を頼りにして加入してくる仲間が増えて、東京土建は国内最大の産業別労働組合に成長しました。一番最近では、アスベスト被害に苦しむ仲間に20年近く寄り添い、共に裁判を闘い、とうとう国や建材メーカーに責任を認めさせて、アスベスト給付金制度を設立しました。

多くの仲間を組織することで、組合としての発言力を増すと同時に、新たな仕事や生活に必要な要求をすくい上げ、そしてその要求を実現して、組合員の生活や仕事を守ります。組合運動を進めて、

働く者たちが主役である建設業を作るためには、組合員を増やすことは欠かせません。

豊島支部では地域分会を中心に、組合チラシのポスティング、立て看板、ポスター貼り、組合員宅や、会社への訪問活動を行います。平日の夜に、地域分会が管理する分会センターに集まって、仲間を増やすための方策を話し合い、行動します。分会所属の、毎月、群会計さんへ組合費保険料を納めている組合員さんは、時間のある時だけでも大丈夫ですので、分会センターへ顔をだして、仲間づくり運動へご協力ください。また、会社で組合に加入している組合員さんは、仕事先の現場で、東京土建へ未加入の方へ、仕事に関わる心配ごと、税金や法律相談などは東京土建への相談を勧めて下さい。

下記9月の統一行動日に、夜間に分会センターに集合して、仲間づくり運動を行います。

9月のなかまづくり行動日(分会によって変更する場合があります)
9月11日(木)、12日(金)、16日(火)、17日(水)、18日(木)、
25日(木)、26日(金)



東京1陣、2陣の和解成立に 宮島団長、 届いてますかー！

8月7日、東京高等裁判所にて、建設アスベスト東京1陣と2陣訴訟で、1審被告の建材メーカーと1審原告とのあいだで和解が成立しました。

全国で最大規模の東京1陣建設アスベスト訴訟は、1審被告17社と、1審原告合計446名との間に、和解が成立した事は、画期的な成果であるとの報告でした。

東京地裁提訴から17年間が経過し、すでに被災者の9割以上の方が亡くなられています。豊島支部南池袋

分会だった宮島和男団長（首都圏建設アスベスト訴訟）もその1人です。宮島団長は、一呼吸すると1歩とまり一呼吸すると1歩とまることを繰り返し歩きながらも、被害者の先頭に立って闘い続けてきたとの報告もありました。宮島さんは闘い半ばにしてお亡くなり、さぞかし無念な思いだったことでしょう。もっと早く元気なときに、和解ができていたらと残念でなりません。宮島さん、お疲れ様でした。そして和解ができて本当によ



和解が成立後、星楼会館に場所を移しての報告集会

かったですね。

東京1陣訴訟の改修・解体作業従事者40名と、東京2陣訴訟の改修・解体作業従事者及び屋外作業者の原告17

名については和解ではなく、両高裁にて今後、判決を言い渡されることになりました。

(工藤美也子通信員 椎名町分会)

これからは全世代が主役 ～分会の垣根を越えて～



8月2日、池袋東武屋上にて椎名町分会主催のビアガーデン交流会を開催しました。今回はみんなで楽しむことを主に他分会にも声掛けして、椎名町分会から25人、他分会から15人の40人が参加しました。

普段だどうしても若手が集まりにくい状況があったので、今回は機関会議などで呼びかけを行いました。その結果、若手だけでなく女性の会やPALの役員も参加してくれました。

椎名町分会の人たちも負けじと大盛り上がり。組合のことや仕事のこと、健康や家族のこと、話し始めたらもう止まりません。2時間は短すぎました。

個人的には、各分会だけで活動するのは今後もっと大変になるだろうと思っています。これからは、椎名町分会としての活動はもちろん、全分会の仲間との交流を増やしたい。やはり、年齢や仕事に近い人が周りに多ければ、もっと活発な交流が可能だし、実は地元の先輩後輩だったり、行きつけの飲み屋が同じだったり共通項が見えてくる場合もあります。

建設業にとって厳しい状況が続く今こそ、分会や世代にこだわらない、全世代が集まって交流できる活動を支部だけでなく、各分会でも提案してみてもどうでしょうか。

(田中承宏教宣部長 椎名町分会)

コメ不足危機を学習

6月27日、教宣学習会を開催し、テーマは、『「米危機」今年はもっと深刻に！小泉「備蓄米」たたき売りで米生産・流通は崩壊』。

講師は農民連ふるさとネットワーク事務局長 湯川喜朗さんでした。

24年は米の供給量と需要量の差がなくなり、深刻なコメ不足を招きました。24～25年の需要量は、前年より31万トンも減少するとの見通しです。卸業者も販売抑制をかけなければならないコメ不足が続くそうです。需要の大幅減がなければ、備蓄米供給も焼け石に水とのことです。

10年に米戸別所得補償が民主党政権により導入されましたが、13年に安倍内閣によって廃止されてしまいました。戸別所得補償制度とは農業者が安心して農業に取り組めるように、米や麦、大豆などの対象となる農作物の生産者に対して、生産費と販売価格の差額を保証する制度です。この制度は、食料自給率の向上と農業の持続可能性を高めることを目的としています。

石破首相は8月初めにインバウンド（訪日客）の増加や一般家庭での消費拡大も高騰の一因になったとの見方を示し「生産量に不足があったことを真摯に受け



農民連ふるさとネットワーク事務局長 湯川喜朗さん

止める。増産に舵を切る」と述べています。しかしコメ農家からは「増産と言うのは簡単だが、減反していた田んぼでもう一度米づくりをやるのは開墾するくらいの労力が必要」、「増産で予想されるコメ価格の下落に対する、戸別補償制度などの支援を求める」、「生活していけるかという不安定をなくし、若者が入って来られるようにしてほしい」などの声が聞かれる。

コメ価格は、7月の後半から平均販売価格が、10週ぶりに上昇しています。今年の秋は、古米や輸入米ではなく、日本の新米が安定して食べれるよう願ってます。

(新井睦子教宣部員 南池袋分会)



特集 | 戦後80年 (3・4面)

被爆体験の継承と若い世代の活動

被ばく80年の節目となる今年、15年ぶりとなる原水爆禁止世界大会・2025年長崎大会に参加しました。毎年8月7日～9日にかけて長崎市で開催される、核廃絶と世界平和をうったえる国際的な集会として、国内外から大勢の参加者が集い、その想いを被爆地から伝えます。

今年の長崎大会では、被爆者の高齢化が深刻化する中、被爆体験の継承がテーマとなりました。開会行事

では、昨年、ノーベル平和賞を受賞した田中熙巳氏（被団協代表委員）が、自らの壮絶な体験を涙ながらに証言し、参加者の胸を強く打ちつけました。この被ばく体験を話せる方たちが、どんどん高齢化していき、少しずつ語り部が減ってきている問題が提起され、今後はどのように後世に伝えていくことが出来るかが課題となっています。報告の中で、被ばく者の中には、自身が亡くなるまで被

ばく体験を家族にまで秘密にしている方もいて誰もが、体験を多く語れるものではないという事も分かりました。

それでも閉会総会では、各国からの様々な年代の方はもちろん、被爆二世・三世や高校生平和大使など若い世代も登壇し、自らの活動経験を語り、核兵器廃絶運動を担っていく決意を示したことに感動しました。

この大会に参加して、「当たり前の

ようにある平和が、当たり前じゃなくなる前に」と考え、一人ひとりが今、出来る運動を少しずつ積み上げていくことが大事だということが分かりました。今年の長崎は荒天が続き、飛行機の遅れなどもありましたが、本当に参加して良かったと改めて感じました。この経験を組合運動・平和運動に大きく活かしていきたいと思います。

(寺島耕平 豊島支部書記)

自分の子供達にも戦争への 学びの機会を作っていきたい

長崎原水爆世界大会に参加して

以前から参加を考えておりました原水爆禁止世界大会に参加させていただきました。

初日のバスで、東京原水協から参加の学生さんのお話を伺う機会がありました。平和への思いや様々な知識に驚かされ勉強させていただきました。

式典では被爆者の方々の体験談を生の声で聞きました。戦後80年、当時の体験を語る方々も高齢で、当時を思い出し言葉を詰まらせながら話している姿を見て、とても心苦しくなりました。原爆について今後もっと学んでいくべきだと初日から考えさせられました。

二日目は「動く分科会」を選択しました。長崎駅からバスで佐世保へ行き、佐世保湾をフェリーで見学しましたが、一帯が軍艦、自衛隊、米軍施設で埋め尽く

されていました。佐世保は米軍基地の数では、沖縄、神奈川に続いて3位で、アメリカ艦船が母港となっているのは横須賀と佐世保の二か所とのことです。ガイドさんが海の中にクロダイの群れがいると教えてくれ「他にもたくさん魚がこの港にはいるんですが漁業でできないよ」と話していたのが印象的でした。

その後、浦頭の佐世保引揚援護局の資料館を見学しました。戦後海外から約629万人が日本に引揚げ、うち139万人が上陸した場所です。当時の佐世保引揚援護局の敷地は現在のハウステンボスだそうです。

長崎に戻り原爆資料館で、話でしか聞いたことのなかった被害状況や悲惨さを資料館で目の当たりにし、思っていた



右端うしろ 柴山さん 前寺島書記

ものを遙かに超える衝撃を受けました。核兵器がいかに恐ろしいものであるか、そんなものが日本に二つも落とされたこと、罪のない市民がどれだけ苦しみ、今なお苦しみ続けていること。今まで以上に戦争の恐ろしさ感じました。

最終日、時間が限られている中、豊島平和委員会の平田さんに爆心地から500mの「城山小学校」と「平和公園」を案内していただきました。今回経験を語ってくださった、被爆者の方々や、戦争経験を語ってくれていた祖父母の思いは、次世代に繋げていかなければなら



佐世保港に停泊中の軍艦

ないと改めて強く感じました。今回聞けたお話はごく一部かもしれませんが、生の声を聞いた貴重な経験を無駄にしないよう、私自身、子供達にも戦争への学びの機会を作っていきたいと考えます。(柴山浩司支部副委員長 椎名町分会)

本部教宣部平和取材 東京大空襲を歩く

7月13日、本部教宣部・平和共同取材で1945年3月10日に起きた東京大空襲の学習会に参加しました。午前中はフィールドワークとして、東陽公園を出発し、戦災慰霊碑や母子像、馬頭観音などを回り、江東支部まで歩きました。

東陽公園は、発災時数えきれないほどの遺体を仮埋葬していた場所で、公園が面する永代通りや四ツ目通りには路上のいたるところに遺体が転がっていたという説明が



ありました。

その後、東陽町駅のすぐ裏にある深川親子地藏尊へ。後で回った戦災供養之碑・六地藏尊もそうなのですが、江東区には町内会の各所にこういった慰霊碑や地藏尊があり、それだけ被害が甚大だったこと、忘れてはいけないという思いが強い地域なんだという説明がありました。

続いて深川高校へ。ここには都内の高校で唯一、校内に戦災慰霊碑があります。当時東洋一の立派な校舎だった深川高校にはたくさんの人が逃げてきて被災されたそうです。公立の高校の敷地内に慰霊碑があることが非常に大きな意味を持つとガイドの工藤さんは言っていました。

前述の六地藏尊を見学した後、江東馬頭観音へ。工場地帯であった江東区は物資を運ぶために多くの馬や牛がおり被害も多くありました。

空襲体験者の声を聞く

午前中のフィールドワークを終え、江東支部で昼休みのあと、すぐ近くにある東京大空襲・戦災資料センターへ向かいました。館内見学の最後に、空襲体験者の二瓶さんによるお話がありました。最も印象に残ったのは、防空法という法律によって、一度火災が発生すると、中学生以上の男子は防空壕にとどまっていたはならない、火を消しに外に出ていかななくてはならないという、今では考えられないことが現実にあったことが衝撃でした。

このほかにも、1945年に入ってから小規模の空襲が増えて人々の内心では本当に戦争は勝っているのか疑心暗鬼になっていたり、東京大空襲の前日だけピタッと空襲がなかったこと、空襲時防空壕にいてもわかるくらい人々の悲鳴や足音が普段と

違っていて、消火に行っていた父親が血相変えて「今すぐ出る。逃げるぞ」といって家族全員で逃げたこと、逃げる途中ではぐれてしまい、のちに両親と合流できた時、周りにいた人はほとんど焼死していたことなど、聞いていて本当に胸が苦しくなるような話をたくさん聞くことができました。

最後に、二瓶さんが「ここ最近の世界情勢を見ていると昔に似てきた」と言っていました。実際に紛争が起きているのに、どこか遠くの出来事にとらえていること、昔より兵器が無人化され、ボタン一つ押せば目的地まで飛んでいくこと(B-29焼夷弾も上空からボタン一つで投下された)などが似てきていると危惧していました。自分たちの世代は争いがない平和が当たり前だと思っていたので、この一言にはハッとしました。今ある平和が当たり前ではないと痛感すると同時に、絶対に戦争をしてはいけない、過去の経験を語り継いで平和な世界を作っていかなければいけないと思いました。

(田中承宏教宣部長 椎名町分会)

6月27日に東京大空襲・戦災資料センターへ行きました。場所は、東京土建江東支部のすぐ近くです。

館内1階は映像・談話室、2階は展示室になっており、戦時下の日常や空襲の実相、空襲後のあゆみなどを展示していました。その中に、「灯火管制下の部屋」の再現されていました。灯火管制とは、空襲の目標にならないように、屋外に灯りがもれないようにすることです。窓に黒いカーテンなどが引かれたり、電灯を黒い布で覆ったりしていました。

防空新聞もあり、映像では、焼夷弾を作っている所も見られました。

東京大空襲とは、第二次世界大戦の連合国による植民地・占領地も含む日本空襲の一環です。その中で画期になったのが、1945年3月10日の下町大空襲です。アメリカ軍は、日本向けの油脂焼夷弾を開発し、1665トンの大量の焼夷弾を投下しました。これにより、深川区、城東区の全域、浅草区などの、下町の大部分を焼き尽くしました。

罹災家屋は約27万戸、罹災者は約100万人でした。焼死・窒息死など、9万5000人を超える方が亡くなりました。

世界では今でも戦争や紛争が絶えませんが、争いのない世界にしたいです。日本では、中国との戦争が懸念されていますが、何としてでも戦争は阻止しなければなりません。軍事ではなく、対話で！

(原田陽弘支部教宣部長 かなめ分会)

1945年3月10日未明、アメリカ軍により東京の下町一帯は焼け野原になり、約10万人が命を奪われ、約100万人が住む家を失いました。

アメリカ軍による無差別爆撃でした。逃げる所もなく、家財も焼かれ、傷つき命を失いました。

多くは女性、子ども、高齢者の民間人でした。いつも弱い者が多く犠牲になります。

世界では今も戦争が絶えません。私たちと同じふうの人びとが、傷つき命がうばわれることのない未来になってほしいと思います。

(大嶋清美教宣部員 上池袋本町分会)

豊島支部教宣部

平和学習で二つの資料館を訪問



左から野本さん、大嶋さん、原田さん



灯火管制下の部屋を再現



大空襲・戦災資料センターの展示物

はじめに、江東区北砂にある東京大空襲戦災資料センターに行きました。このセンターは戦争の体験を受け継ぐために、その時のリアルな実相を知ってもらい、共有していくことを目的としています。地域や、個人が受けた被害や、悲惨な経験が展示されていました。

次に見学したのは新宿にある「帰還者たちの記憶ミュージアム」です。館内を3つのコーナーに分けていて、「兵士」のコーナーには、実際の召集令状、軍隊手帳、軍服、日誌などが展示されていて、手

帳や日誌には家族や恩人に当てた思いが綴られていました。「戦後強制抑留者」のコーナーの、シベリアでの極寒の過酷な生活が伺える展示で胸を打たれました。「海外からの引き上げ者の労苦」のコーナーには引き上げ船の中の様子などの、貴重な写真が展示してありました。どの展示も今では想像を絶する、目を覆いたくなるものばかりでした。二つの資料館を見学して、戦争の一般市民への被害の大きさを感じました。

(野本陽子教宣部員 さくら分会)

環境破壊の最たるもの、それは戦争

いま、世界規模で環境破壊が深刻で、地球全体が存続の危機に直面しています。地球温暖化の加速で気候が大変動しています。気温の急上昇により夏はより暑く、台風はより大型化し襲いくる熱波と洪水に悲鳴を上げています。更に、干ばつもより過酷で大規模な山火事が発生し、森林が減り、農作物の被害も甚大で、飢餓に苦しむ人々が世界中に溢れています。本気で温暖化防止対策に取り組まなければ、この地球上に、すべての生物が住めなくなってしまうのではないかと、強い危機感を覚えます。

ここ数十年の間に、私たちの生活様式は大きく一変しました。ものを大切に思う気持ちが薄れ、利便性のみを追い求める、そんな身勝手な考え方、生き方が地球に異常を生み出してしまったのかも知れません。私たち一人ひとりが改めて日々の暮らしを見つめ直し、できる限り無駄をなくした生き方を心掛け、同時にエネルギーの見直しが不可欠です。原発依存や石炭火力発電から撤退し、再生可能エネルギーへの本格的な転換が急がれます。

地球のための平和

さらなる環境破壊の最たるもの、それは戦争です。戦争がもたらす破壊は桁違い、ひとつの爆弾で、あっという間に森が消え、大量にばらまく有害物質に大地が汚染され、半永久的に荒廃してしまいます。大きな破壊力で地球に打撃を与え、温暖化をよりいっそう加速させてしまいます。悲しいことに世界のあちこちで内戦や紛争が起こっています。今すぐ止めなければ、もう戦争をしている時間はありません。この地球上に生まれてきたすべての命が生を全うできることを願っているのです。

世界中が平和にならないと、美しい地球を取り戻すことができません。みんなで手を繋ぎ、壊してしまった地球環境を再生するために力を合わせていきましょう。もうこれ以上、自然を壊す事は許されません。(間辺美恵子通信員/豊寿クラブ会長 南池袋分会)